

寅彦の見た風景 6

野村 学

【丸山台】

「程ナク入ルハ浦戸港 此処ニ待チ居シ別役ノ甥ト対面シ虎病ノ消毒トテ丸山台ニ上陸シ此処ニテ其法ヲ行ヒ稻荷新地ヨリ車ニ乗り家ニ帰りケリ」 (※下線筆者)

『春秋之夢 (明治 25 年)』(「寺田寅彦全集 第 18 巻」/岩波書店/1997 年に収録) より

新型コロナウイルス感染症が世界的な猛威を振るっている。大規模自然災害レベルの人的・経済的被害がもたらされているが、さて寅彦先生なら現状をどう見るだろうか。

寅彦先生の少年時代にも甚大な被害をもたらした感染症が幾度も流行している。コレラである。日本は文政 5 年 (1822 年) にオランダ船が長崎にこの伝染病をもたらして以来、明治期を中心に日本の近代化と軌を一にするかのように繰り返し発生したコレラによって大きな被害を受けてきた。当時の記録 (※1) によると明治 10 年 (1887 年) から明治 19 年 (1886 年) の間に、日本は五回のコレラ流行に見舞われ、396,416 人が感染し、256,361 人が死亡したそうだ。凄まじい数である。特に寅彦少年が父・利正の退職に伴う二度目の帰郷を果たした明治 19 年 (※2) の流行時には 155,567 人が感染、103,105 人が犠牲になるなど被害は甚大であった。

冒頭の「春秋之夢」には、その被害の大きかった明治 19 年に神戸から海路高知入りした寅彦少年 (当時 8 歳) が、高知の地を踏む直前に鏡川河口のほど近くに浮かぶ小島・丸山台で“虎病”の消毒を受けたことが記されている。虎病とはコレラのこと。この記述の背景に、近代日本の公衆衛生行政、防疫・検疫行政の確立に大きな影響を与えたコレラ流行という大きな歴史上の事実があったのだ。



写真 1：寅彦少年の上陸した鏡川河口に浮かぶ丸山台

寅彦少年の上陸した丸山台は高知市街地の南を東西に流れる鏡川の河口に位置する小島である（写真1）。昭和南海地震（昭和21年）で崩れかけたこともあるが、平成6年に高知県により親水公園として整備された。明治16年に自由民権運動の指導者・板垣退助が外遊から戻った際にここで歓迎会が催されたことで有名。その日は「丸山台付近は海と陸とを問わず人と船で身動きもできない程」（※3）であった。ちなみに当時は料亭の経営するオープンして間もない「丸山台温泉場」があったようである（※4）。

寅彦少年が消毒を施されたこの丸山台。上述のように高知における自由民権運動の記念碑的存在として県民の間では有名であるが、記録にあるような言わば“コレラ検疫所”としての機能を果たした歴史があったことはあまり知られていないのではないだろうか。筆者は、寅彦先生の当時の歴史を語るこの記録によって、寅彦先生の生きた時代にこのような災厄の時代があったこと、また見慣れた丸山台にこのような過去があったことを知った。寅彦少年と日本のコレラ禍の歴史が秘められた丸山台の風景を見るにつけ、現在の“コロナ禍”を取り巻く状況について、寅彦先生だったらどんなことを考えるだろうかと思わずにはいられない。



位置図（矢印の先が丸山台）

《引用文献・参考文献》

- ※1： 翻訳『北里柴三郎「日本におけるコレラ」（1887年）』（北里柴三郎著/林志津江訳 /北里大学一般教育紀要/2015年）
- ※2： 『寺田寅彦全集 第17巻 雑編 年譜/目録』（岩波書店/1997年）
- ※3： 『無形 板垣退助』（平尾道雄著/高新企業株式会社/昭和49年6月）
- ※4： 『此君亭と丸山台』（公文豪著/土佐史談会/平成9年8月/「土佐史談205号」所収）